

一事例の失語症者の語りにみる発症からの体験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6101

一事例の失語症者の語りにみる発症からの体験

山田 理絵 泉 キヨ子*

KEY WORDS

Aphasia, narrative, experience

はじめに

失語症は脳血管疾患患者の約20%前後を占め、毎年約2万人の失語症者が発症する¹⁾。失語症という障害によりそれまでの生活や生き方が変化している失語症者が苦難を乗り越え、自らの力で新しい生活を再構築していけるよう援助するには失語症者の体験を理解することが重要だと考える。失語症に関する研究の多くは、言語療法の効果²⁾ 言語機能の改善に影響を及ぼす要因の検討³⁾、失語症のタイプと重症度による言語機能改善の相違⁴⁾ など言語機能に焦点が当てられている。失語症者の語りにから体験を明らかにした研究⁵⁾ が稀少であることには、言葉を介して語られる体験を言葉を失った失語症者に語ってもらう困難さが影響していると考えられる。体験は言葉を介して語られるのだが、言葉を失った失語症者から語ってもらうことには限界もある。しかし、失語症は発症前のように話せるほど完全な回復は期待できないが、徐々に言語機能が回復しある程度の会話が可能になることが報告されている⁶⁾。そこで、本研究の目的を失語症者が発症からの体験を失語症者の生の声、語りを通して明らかにすることとした。

方 法

1. 事例紹介：60歳代男性、10年前に左被殻出血を発症し、軽度の運動性失語、右片麻痺があるが自力歩行可能である。言語療法は、発症3ヶ月後より開始し2年9ヶ月間継続した。現在無職、妻と二人暮らしである。患者会の活動を夫婦で行ったり、趣味の旅行やゴルフをしたりと活動的な生活を送っている。

2. データ収集方法：半構成的面接5回、参加観察2回、記録調査を行った。初回面接で「失語症発症から今までの体験をご自由にお話ください」と示し、

2回目以降は前回得た情報を確認し体験がより具体的になるよう進めた。面接内容は、許可を得て録音し逐語録を作成した。研究者は面接時、筆記用具を準備し、言葉が出ず苛立った言動が見られたり申し出があった時は小休憩をとる、短い簡単な言葉でゆっくり話す、話を急がせないことに留意した。参加観察では、患者会の様子、妻や友人との会話などを観察し、早期に記述し資料とした。調査期間は、2004年8月～11月であった。

3. 分析方法：語りにから作成した逐語録と観察記録を各面接毎に繰り返し読み熟読し、体験を現している部分に対し内容に即したコード名をつけた。次に、同じ意味内容を持つコードを分類し抽象度を高めサブカテゴリーとした。サブカテゴリーの内容の類似性に従って分類しカテゴリーとした。分析結果を示し自分の体験として同意できるかどうか確認を得た。また、リハビリテーション看護学研究者、心理学研究者、担当言語聴覚士に分析結果を提示しスーパーバイズをうけた。

4. 倫理的配慮：研究参加、中止、中断は自由であり不利益を被らない、匿名性、秘密保持、記録物やテープは研究終了後消去することを文書と口頭で説明し署名をもらった。

結 果

作成した逐語録および参加観察記録より体験に関する事柄を抽出し、その意味内容を忠実に分類した結果4つのカテゴリー、8つのサブカテゴリーが抽出された(表1)。《 》はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリーを示す。表2には、事例の語りを示した。

表1 一失語症者の発症からの体験のカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
言葉を失い途方に暮れる	家族とさえ思いが通じない 言葉と共に生きる意欲も奪われた
立ち直りのきっかけ	諦めていた海外旅行に行って掴んだ身体の自信 健常者とスポーツで勝負し勝った誇り
言葉に向かう	言葉で気持ちを伝える 言葉を出しやすくする工夫
言葉が出ないことに慣れる	態度で気持ちを伝える 言葉がなくても通じ合う

1. 《言葉を失い途方に暮れる》：発症後約1年は、意図することと話し言葉が乖離し、話しても相手の反応がおかしいことや頭が疲れて思いを言語化できないことに苛立っていた。長年連れ添った妻なら言葉がなくても気持ちを理解してくれるという期待に反して、妻はその思いを理解することが出来ず〈家族とさえ思いが通じない〉状況であった。職業、歌という趣味まで奪った失語症はどの障害よりも一番重いと語り〈言葉と共に生きる意欲も奪われた〉と悲嘆し、行動意欲が低下して無関心になることもあった。

2. 《立ち直りのきっかけ》：失語症と右片麻痺を持つ事例は、今までのように行動できないことを悔やみ旅行やスポーツを断念していた。しかし、旅行に行き歩けたことがきっかけとなり〈諦めていた海外旅行に行って掴んだ身体の自信〉を獲得した。麻痺の足で歩いた体験より残存能力に気づき、病気を理由に諦めず自分のできることに取り組もうと考え方が変化し積極的に活動しスポーツも開始した。〈健常者とスポーツで勝負し勝ち得た誇り〉は、今までの生活を継続できないことへの悲嘆や生きる意欲の喪失という低下した自尊感情、行動意欲を向上させるきっかけとなっていた。

3. 《言葉に向かう》：行動範囲が拡大すると会話の機会も増加し、失語症を知り会話のペースを合わせてくれる人だけでなく、あまり失語症を知らずよそよそしい態度で接するようになった。心通う同朋なら非言語的コミュニケーションで伝わるが、情報伝達や意思疎通の媒介に言葉を用いる一般社会との交流や対人関係の維持には〈言葉で気持ちを伝える〉ことが必要であった。そのため、言いたいことを紙に書いたり、原稿を読みながら話すなど〈言葉を出しやすくする工夫〉を見出し言葉の再獲得に向け努力をしていた。

4. 《言葉が出ないことに慣れる》：言葉の再獲得に取り組む一方で、言語機能は発症前のように改善せず話せないと実感していた。話したいが話せない葛藤に折り合いをつけるため、その場に出向くことで誠意を見せたり、深々と頭を下げ感謝を示すなど〈態度で気持ちを伝える〉ことをしていた。事例の努力だけでなく周囲のサポートも必要であった。周囲の人々が事例の言いたいことを察し〈言葉がなくても通じ合う〉状況を整え意思疎通が図れることも、事例が言葉に固執せず失語症を引き受けていくには重要なことであった。

考 察

失語症者の発症からの体験の語りを通して、言葉を喪失しても自分にはできることがあると考え障害に対する価値観を転換させ、言葉を再獲得する取り組みと言葉が話せないことに慣れるバランスを図りながら失語症を引き受け生きていることが語られた。以下に失語症者が障害をもち生きるという視点から考察する。失語症者は、長年趣味の海外旅行やゴルフを楽しんでいたが障害により断念していた。しかし、障害があっても趣味の継続が可能であることがわかると障害に対する価値観が転換した。脳卒中患者が、病気になっても自分が大事にしてきたことが全て奪われたわけではないと認識することが生きていくことを可能にし、意味あるものにする⁷⁾。失語症者は発症前の生活を再体験することで、今まで自分が大切にしてきたことの中で何がまだ自分に残されているかを理解し、それを楽しむことで障害を引き受け生きていくようになったと考えられる。

失語症者の障害への適応には、「発症前の自分」と「失語症になった自分」の構築が必要になってくる⁸⁾。失語症者が言葉の再獲得に向かう一方で話せないことに慣れ、両者のバランスを維持しているよ

表2 サブカテゴリーと失語症者の語り

サブカテゴリー	失語症者の語り
家族とさえ思いが通じない	うちの母ちゃんとおってもなかなか喋れん。病氣した後は、こんなこと言いたい、言っとることがわからんがや。喋れ、喋れたらわかるけど、喋れなんたら言うとの内容どっちがどうやら。言うても、は、はがゆい。頭にくる。
言葉と共に生きる意欲も奪われた	昔はね、歌が好きなんやね。物凄く好きで何でも歌う。カラオケやとったがね。今度駄目やろ。口が回ろうとするけど回らん、口が出ん。はがやしいなあ。昔は歌すっと出たんに、情けないわな。・・・心にイライラする、もやもやたまる。失語症になって1年目はイヤーになる。あれも駄目、これも駄目。生きること何度もイヤーになった。
諦めていた海外旅行に行っ て掴んだ身体の自信	オー、オースト、ラリア行く前は、何をしてもおもしろくない。・・・楽しかった。あん時からね、いっぺんなんちゅうかば一と、あ、明るくなって、自分の気持ちがころ一と180度変わった。な、何しても楽しいになるわね。何してもやろうという気がなったね。やっぱり、で、できることはやらんとだめやということになったね。やる、ほのこと、考え変わったね。・・・次は、ほ、香港。い、行かな、そ、損やと思って、その次はハワイ。ハワイわね、うちの母ちゃん行っていない
健常者とスポーツで勝負し 勝った誇り	健常者相手に勝った、身体、障害者ばかりじゃなくて、け、健常者大会。び、びっくりした。新聞に載ったや。皆上手い人ばっかや。勝ったやろ、優勝や。う、嬉しいがね。
言葉で気持ちを伝える	私と会った友達、皆に何でも言うわね。本当。お前よく喋るなっていうわ、喋る、喋ることはできんかもしれんけど。まあ、気持ちをわかってもらえればいいって。ちゃんと言う。また、皆よく言ってくれるわ。だ、だから嬉しい。
言葉を出しやすくする工夫	言うことと抜けることあるがやちゃ。だから、家出る前に言わんなんことは、何と何を言う紙に書いて言わんとね。・・・言おうとすると口もね、思い喋れんがや。原稿をね、書いて方が楽や。原稿見れば言とってても言えてね、言葉が喋りやすい。
態度で気持ちを伝える	喋れんけど、行くだけ行って喋らんでも気持ちはお互に通じる通じとる。誠意が伝わればそんでいいがや。言わんでいいもん、ただ顔見ればお互い来とるってわかるわね。
言葉がなくても通じ合う	母ちゃんわしの言おうとしとる、言うこと大体ピン、ピンと来る。

うに、障害により変化したことに折り合いをつけて障害を生活の中に組み込みことは障害への適応に重要だと考えられた。

結 論

本研究は、一事例の失語症者の体験を語りを通して探求することを目的に、質的帰納的研究を行った。失語症者の体験の語りを通して、《言葉を失い途方に暮れる》時期に《立ち直りのきっかけ》により障害に対する価値観が転換し、《言葉に向かう》ことと《言葉が出ないことに慣れる》バランスを維持しながら失語症を引き受け生きようになったことが明らかになった。

謝 辞

研究に快くご協力くださいましたA様に心より御礼申し上げます。そして、研究にあたりご指導いただきました本学保健学専攻能登谷晶子教授、東京大学能智正博助教授に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 笹沼 澄子 他：失語症の記録－奪われた言葉・取り戻した言葉－。大修館書店、1985。
- 2) 前島伸一郎 他：脳梗塞による失語症に対する言語訓練の効果について－訓練例と非訓練例の比較検討－。総合リハ、24(7)：649－653、1996。
- 3) 佐野 洋子 他：失語症者のリハビリテーションと長期予後。リハ医学、37(3)：161－164、2000。
- 4) Pedersen, P.M. et al : Aphasia after stroke : Type, severity and prognosis. Cerebrovascular Disease, 17 : 35-43, 2004.
- 5) Parr, S. : Psychosocial Aspects of Aphasia, Whose

- Perspectives? Folia Phoniatr Logop., 53 : 266-288, 2001.
- 6) 佐野 洋子 他：脳が言葉を取り戻すとき－失語症のカルテから－. 日本放送出版協会, 1998.
- 7) Benner, P., Wrubel, J, 難波 卓志 訳：現象学的人間論と看護. 医学書院, 1999.
- 8) Brumfitt, S. : Losing your sense of self : what aphasia can do. Aphasiology, 7(6) : 569-591, 1993.

Experience from onset through narrative by an aphasic person

Rie Yamada, Kiyoko Izumi